

山陰地域の土製支脚はどこから来たのか

— 6世紀における九州北部と山陰地域の地域間交流的一幕 —

岩 橋 孝 典

-
1. はじめに
 2. 山陰地域における土製支脚の出現
 3. 九州と山陰
 4. 環有明海沿岸の土製支脚
 5. ま と め
-

1. はじめに

6世紀後半から8世紀にかけて、出雲地域を中心とした山陰地域中央部では土製支脚と呼ばれる煮炊き具が使用される。土製支脚の使用方法は、甕などの煮沸容器を支脚2～3個体で下支えするもので、近現代においては「五徳」と呼ばれる道具と相似た用途を果たすものである。五徳タイプの土製支脚は弥生時代から古墳時代初頭にかけて九州北部から瀬戸内海沿岸地域、関西などの近畿地方中央部において使用されていることが知られる。(池崎1989、岩橋2003、大橋1978、小林1941、杉井2004、山内2001、吉田2003)

ところが、古墳時代前期後半から中期にかけての約200年前後の期間は、このような五徳タイプの土製支脚は全国的に使用されていない。筆者が土製支脚について最初に検討を行った2003年の時点では、6世紀後半に出現する山陰地域の土製支脚は、山陰地域で自然発生したものであるのか、どこかにルーツとなる故地があるのか、全く不明な状態であった。

その後、美浦雄二氏による佐賀県内の土製支脚研究をはじめ各地の研究者の論説や報告書・論文に触れる中で、5世紀末～6世紀にかけて九州北部の特定地域で土製支脚が使用されていることが明らかになったため、ここに概要を報告し、研究の俎上に乗せることとしたい。(美浦2014)

また、杉井健氏は各地の土製支脚の研究事情をもとに、全国を視野に入れた土製支脚の研究史を纏め、土製支脚出現の経緯や、形態差による使用状況の差

異、各型式の相互関係、日本列島内の地域性など検討課題を提示されている。古墳時代の遺物の中で、土製支脚は数量的には多いが、なんとも野暮ったく地味な資料であり、研究状況は至って低調であるが、杉井氏の示された課題は弥生・古墳から古代に至るまで通底し、地域的にも広域にわたる問題を孕んでいる。(杉井2004)

なお、本論で用いる土製支脚の型式分類は筆者分類(岩橋2003)に準拠して突起の数と形態により、Ⅰ類(前方2方向突起)、Ⅱ類(前方2方向・後方1方向突起)、Ⅲ類(Ⅰ類とⅡ類の折衷で、胴部に孔を持つか、中空の個体)、Ⅳ類(前方1方向突起・烏帽子型)、Ⅴ類(柱状、台状)に分類する。

2. 山陰地域における土製支脚の出現

さて、先述のとおり山陰地域では、6世紀後半に土製支脚が出現する。出現時期は須恵器編年で出雲大谷3期(TK43併行)～同4期(TK209併行)である。当該期には、東宗像遺跡(米子市)、石田遺跡、山ノ神遺跡(安来市)、四ツ廻Ⅱ遺跡、春日シヌン谷遺跡(松江市東出雲町)、池ノ奥窯跡、薦沢A遺跡、田中谷遺跡、岩汐遺跡、渋ヶ谷遺跡、石台遺跡、田和山遺跡(松江市)、古浦遺跡(松江市鹿島町)、堂床遺跡(松江市玉湯町)、白枝本郷遺跡、中野清水遺跡、九景川遺跡、古志遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、長廻遺跡(出雲市)、ナメラ迫遺跡(大田市仁摩町)など山陰地域中央部でそれほどの時期差を示さずに出現している。(岩橋2003,2004,2007,2010)

山陰地域では、古墳時代前期に外来系の土製支脚

が鳥取県西部で見られるが、須恵器編年TG232～TK10前後の時期の土器様式の中には、土製支脚は存在しない。移動式カマドや甗など古墳時代中期以降に見られる新出の煮炊き具は、山陰地域においても複数の遺跡で確認されている。しかし、土製支脚そのものは、移動式カマド+甗という煮炊き具セットに当初から加わっているわけではない。

つまり、土製支脚は5世紀中葉～6世紀前半の移動式カマド+甗+甕という煮炊き具セットの導入とは連動せず、さらに後出的な別の契機によって導入されることが考えられる。

3. 九州と山陰

土製支脚が山陰地域に出現する6世紀後半(須恵器編年TK43～TK209:出雲大谷3～4期)という時期に着目し、当該期に(限らず)山陰地域との交渉形跡が多く認められる九州北・中部地域との関わりを見てみよう。

6世紀段階において、山陰地域と九州地域との関連を想起させる遺構・遺物としては横穴式石室、石棺式石室、横穴墓、横口式家形石棺、燈明台石、仕障、装飾古墳、冢陽刻閉塞石、石馬、古墳の別区、出雲型子持壺、須恵器模倣土師器杯など多くの要素が指摘されている。(小田1986、大谷2011、角田1993.2004.2008.2009、小森2012、山本1964)

古墳に関連する九州的要素は、九州地域と山陰地域の首長級階層による情報伝達の結果として、現出したものであり、首長間交流の様子を垣間見ることができるものである。

また、文献史的には『日本書紀』崇神天皇六十年条に、出雲大神の神宝を主る「出雲振根」が筑紫国に行っていて不在中に、弟の飯入根によって神宝が朝廷に貢納されてしまうという事件が知られる。この伝承の忠実性や実年代を実証することはできないが、古墳時代において出雲の豪族本人やその使者が九州北部に出向くことが珍しくはない事象であったことが知られる記述である。(坂本、家永、井上、大野1993)

4. 環有明海沿岸の土製支脚

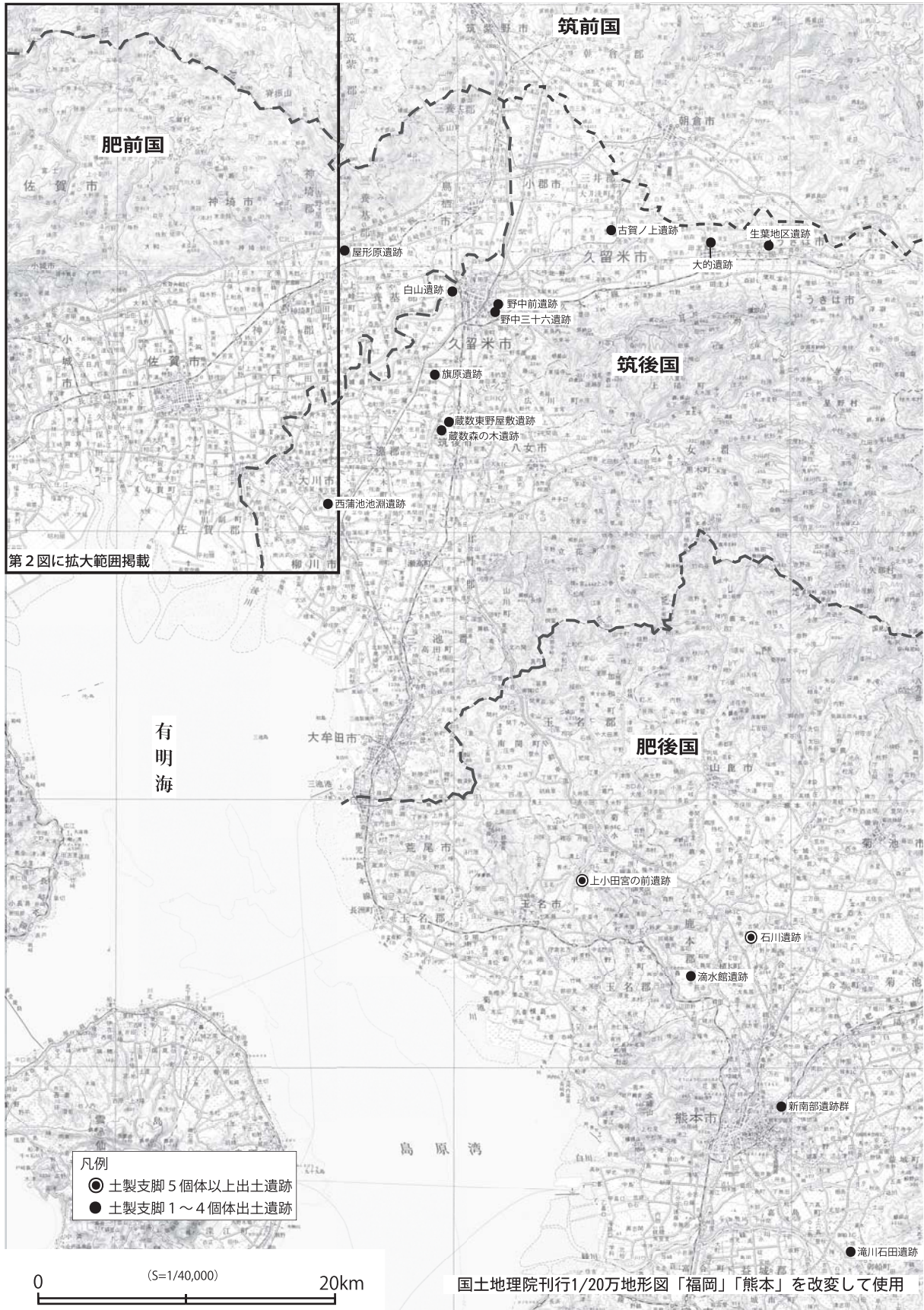
近年、九州北部地域では、6～7世紀集落の発掘調査例が増加しており、それに伴って研究も飛躍的に進展している。⁽¹⁾

そのような状況下ではあるが、九州北部においても土製支脚そのものに対する研究状況は低調な状態であった。その中で、美浦雄二氏は自身が調査に携われた唐津市・菜畑内田遺跡から出土した古墳時代後期の土製支脚に着目し、佐賀県内の古墳時代土製支脚の資料集成と検討を加えられたことは特筆される。美浦氏の検討により古墳時代後期の土製支脚が佐賀平野中央部で集中的に出土することや、鳥栖市方面では出現しないこと、唐津市など玄界灘側では出土数が希薄なことが指摘されている。(美浦2014)

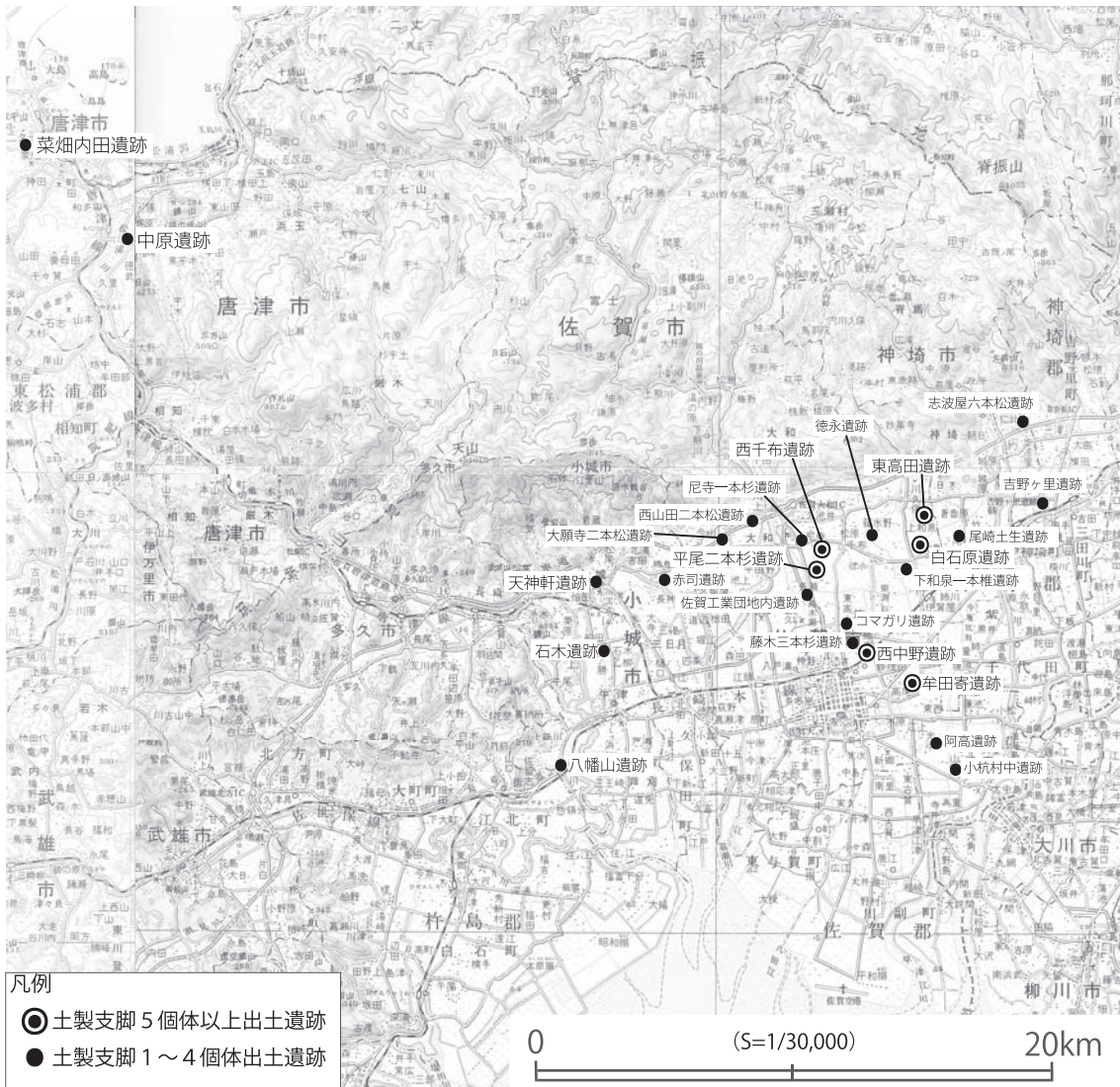
美浦氏の研究をうけて、筆者が福岡、佐賀、大分、熊本各県の報告書を精査したところ、筑後川下流域に位置する筑紫平野を中心とする地域と唐津市周辺、及び熊本県北部で古墳時代後期の土製支脚が出土している状況を確認することができた。現在のところ、肥前国でI類2個体、II類3個体、IV類98個体が確認され、筑前国では、IV類3個体が知られ、豊前国ではIV類2個体を確認した。また筑後国では、IV類18個体、肥後国では、IV類21個体が確認された。九州北部地域では、竪穴住居内の造り付けカマドの火床中央に設置してカマドに掛けた甗の底部を支えるV類土製支脚(中実円柱状)が普遍的に存在するが、専用の土製支脚を製作しない場合は高杯や小型甗などを転用して支脚として使用する例や石製支脚の方がより普遍的に見られる。

本稿では、山陰地域の土製支脚の祖形と考えられるIV類土製支脚の分布域、出土状況、時期について概観し、検討を加えることとする。

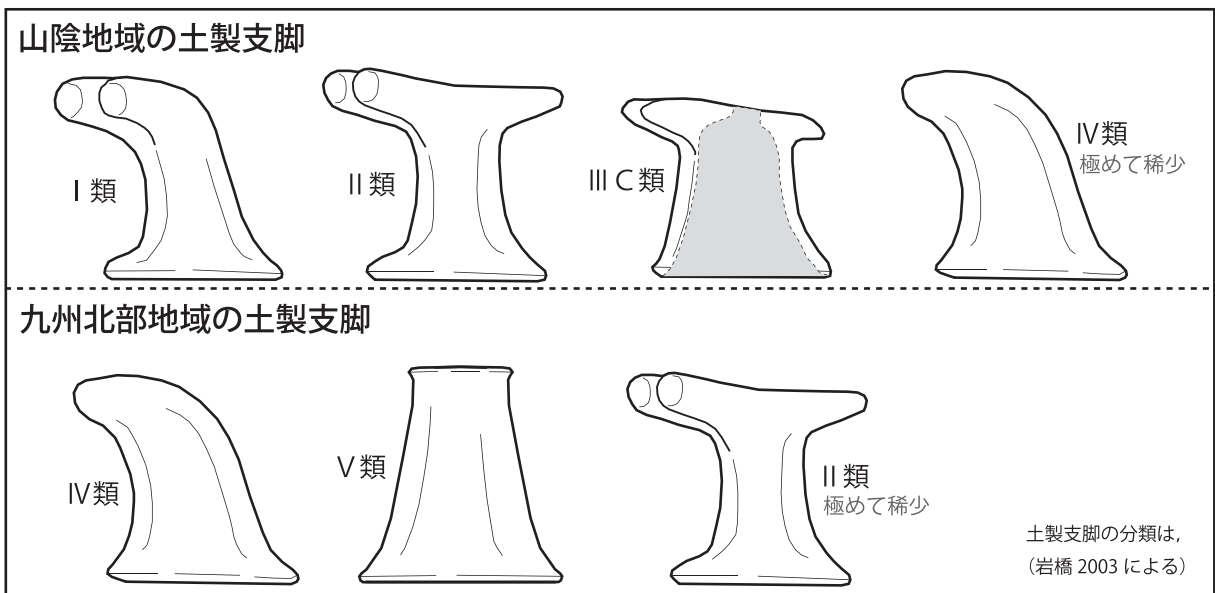
なお、本稿では6世紀代の地域性を検討するために、便宜的に律令制下の旧国旧郡の地名を使用する。この領域比定については、『角川日本地名大辞典 41佐賀県』1982、『角川日本地名大辞典 40福岡県』1988、『角川日本地名辞典 43熊本県』1987を参考にした。また、「筑紫平野」は白石、佐賀、北野、



第1図 有明海沿岸地域における土製支脚出土遺跡位置図



第 2 図 佐賀県内のⅣ類土製支脚出土遺跡位置図



第 3 図 山陰、九州北部地域の土製支脚分類図

筑後川中流、南筑などの小平野に細分されるが、本稿で取り上げるのは「佐賀」と「筑後（筑後川中流と南筑）」の地域が主体となる。

肥前国の状況

肥前国は、7世紀末以前に肥後国と分離して成立したもので、現在の佐賀県と壱岐・対馬を除く長崎県域を含む上国であり、11郡で構成されている。この中で土製支脚が出土しているのは、佐嘉、小城、神埼、養父、松浦の5郡であり、現在の長崎県域での出土は未確認である。

さらにいえば肥前国における土製支脚の分布状況は、旧佐嘉郡域に集中していると言って大過ない。旧佐嘉郡における土製支脚の出土数は、89個体（Ⅰ類2個体、Ⅱ類3個体、Ⅳ類84個体、Ⅴ類1個体）であり、肥前国内の総出土数の91%を占めている。特にⅣ類土製支脚に限定すれば約82%の寡占状況である。隣接する小城郡でⅣ類土製支脚4個体、神埼郡でⅣ類3個体、Ⅴ類6個体、鳥栖市域を含む養父郡でⅤ類1個体、日本海側の松浦郡でⅣ類6個体の出土数である。このように佐賀平野中央部の佐嘉郡域に特徴的に出現し、周辺地域では偏在し、分布状況が急速に希薄化してゆく状況が見られる。

佐嘉郡の中でも特に土製支脚Ⅳ類が多く出土している遺跡として、西中野遺跡（佐賀市兵庫町）・9個体、平尾二本杉遺跡（佐賀市高木瀬町）・19個体、白石原遺跡（佐賀市久保泉町）・20個体、東高田遺跡（佐賀市久保泉町）・9個体、牟田寄遺跡（佐賀市兵庫町）・11個体が特に傑出している。これら5遺跡での土製支脚の出土状況は土坑、井戸、溝状遺構がほとんどであるが、東高田遺跡では9個体中7個体が竪穴住居の造り付けカマド内で出土している。本来3個体一対で使用されるⅣ類土製支脚は、カマド外での使用が想定されるが、東高田遺跡での使用例は集落によって使用形態に差異があることをうかがわせる。

また、白石原遺跡ではⅣ類土製支脚12個体が5棟の竪穴住居跡から出土しているが、これはカマド内に設置した状況ではない。

それでは、肥前においてⅣ類土製支脚が出土している主要7遺跡について概要を紹介する。

西中野遺跡（佐賀市兵庫町）

佐賀市兵庫町大字藤木に所在し、遺構面の標高は2.5～3.0m前後である。沖積低地に立地する遺跡であり、縄文時代～古墳時代後期までの遺構・遺物は見られない。6世紀末頃から遺構・遺物が出現し、7世紀前半に集落が拡大する状況が見られる。低地に立地する集落なので竪穴住居は存在せず、全て掘立柱建物で構成されている。

5・8・13・40・44区の土坑、溝跡からⅣ類土製支脚が9個体出土している。

佐賀平野の中で使用される土製支脚としては最も後出の一群といえる。

牟田寄遺跡（佐賀市兵庫町）

佐賀市兵庫町大字瓦町に所在し、遺構面の標高は2.9m前後である。沖積低地に立地する遺跡であり、当遺跡内で弥生時代後期～古墳時代前期に形成された集落は、樹皮敷き又は礎板を持つ掘立柱建物のみで構成される佐賀平野南部に特徴的な集落である。

古墳時代中期末～後期には土坑、井戸が見られるが15区では、井戸SE15034と土坑SK15004からⅣ類土製支脚が各1個体出土している。SE15034からは土師器甕、鉢、壺、杯が共伴しているが須恵器がないために帰属時期を即断しがたいが、隣接するSE15018、SE15023からはTK23～MT15前後の須恵器が出土している。土坑SK15004からはMT15前後の須恵器甕が出土しているほか、木製の馬具（鞍前輪）が出土しており、集落内に乗馬ができる階層がいたことを物語る。

16区で検出された井戸SE16022の底面近くでⅣ類土製支脚1個体が出土している。埋土中からは土師器杯、甕、小型丸底壺が出土している。須恵器が共伴しないので判然としないが小型丸底壺の存在などから5世紀末に遡る可能性がある。

海退のために形成された滲筋と推定される流路SX17050の6区画7貝層からⅣ類土製支脚1個体が出

土している。ここではMT15期の須恵器杯蓋が出土しているほか、隣接する7区画貝層からはTK47前後の須恵器把手付無蓋高杯が出土している。

牟田寄遺跡で出土したIV類土製支脚4個体は、いずれも共伴する須恵器などからTK47～MT15前後に帰属するものと考えられ、佐賀平野の古墳時代後期土製支脚の始源期を考えるうえで重要な資料である。

平尾二本杉遺跡 (佐賀市高木瀬町)

佐賀市高木瀬町大字長瀬に所在し、標高は5.5m前後の沖積低地に位置する。2000年に調査が実施された1区では、古墳時代後期の遺構として掘立柱建物36棟、土坑238基が検出され、600点以上の木製品、自然木が見つまっている。門のある扉財の出土や、掘立柱建物のみで構成される状況が特徴的である。12個体のIV類土製支脚が出土しているが、全て土坑からの出土である。2～4区でも土坑、溝から7個体のIV類土製支脚が出土している。

当遺跡では、縄文時代晩期から散発的に遺構・遺物が見られるが、常に洪水の危険に晒される低地帯であり、人々の活動痕跡は散発的である。5世紀末からこの低地帯の再開発が開始されたとみられ、平尾二本杉遺跡は、その遺構・遺物の充実ぶりから古墳時代後期における低地開発の拠点的な集落と考えられている。

当遺跡における土製支脚出土遺構の多くは、6世紀後半～7世紀初頭に帰属するものと考えられるが、IV類土製支脚1個体 (Fig.135-65) が出土した4区井戸SE4010は、MT15前後の須恵器が複数出土しており、6世紀前半に位置付けられる資料である。

白石原遺跡 (佐賀市久保泉町)

佐賀市久保泉町大字下和泉に所在する。遺構面の標高は6.9～8.2mであり、微高地と緩斜面を含んだ洪積台地に立地している。報告書中では遺跡内の遺構変遷をI～VIII区分し、古墳時代後期はIV期とされている。当該期に帰属する遺構として、堅穴住居跡102棟以上、掘立柱建物146棟以上及び多数の井戸、

土坑などが検出されている。そのうち6棟の堅穴住居から13個体 (II類3個体、IV類10個体)、3基の井戸から3個体のIV類土製支脚、2基の土坑から4個体のIV類土製支脚が出土している。なかでも堅穴住居SH 30347は6世紀前半に帰属すると考えられ、比較的早い時期から土製支脚が出現していることが窺われる。ただし、堅穴住居跡の総数に対して、土製支脚が出土している堅穴住居跡は6%に満たないため、各戸で使用する日常的な道具とはいえない。

また、7世紀初頭の土坑SK21090から出土しているII類土製支脚3個体は、後方突起がヒレ状となるII C類と細分されるものである。II類自体が佐賀県内では当該遺構でしか見られない稀少例である。この3個体については帰属時期が7世紀に下ることから、山陰地域から逆に影響を受けたことを考慮する必要がある。

東高田遺跡 (佐賀市久保泉町)

佐賀市久保泉町大字上和泉に所在する。佐賀平野北端に近く、遺構面の標高は16.6～19.3mと佐賀平野の古墳時代集落の中では比較的高所に立地している。白石原遺跡や後述する西千布遺跡と同様に洪積台地上に立地する当集落遺跡では、堅穴建物が主要建物として建築され、住居内の造り付けカマド近辺で土製支脚が出土する状況が見られる。

6世紀中頃～後半に帰属する遺構としては、27棟の堅穴住居跡が調査されているが、その内SH252、SH255、SH261、SH363、SH369の5棟でIV類土製支脚が出土している。堅穴住居跡数に対する土製支脚の出土率は18%程度なので、どの住居でも日常的に使用する道具とはいえないであろう。

西千布遺跡 (佐賀市金立町)

佐賀市金立町大字千布に所在し、標高は6.7～7mの洪積台地南端に位置する。4区で一棟 (SH4001)、5区で四棟の堅穴建物が調査されており、そのうちSH4001とSH5001で土製支脚が出土している。SH4001は、造り付けカマドを付設しないが、SH5001は北側壁中央部に造り付けカマドを設置し

ている。共にTK43～TK209前後の須恵器が共伴している。

菜畑内田遺跡（唐津市神田）

佐賀県唐津市神田字内田に所在する。松浦彼杵丘陵地と呼ばれる低丘陵から東方の唐津市街に向かって開口する谷地に位置し、遺構面の標高は8.8m前後である。

土製支脚が出土した遺構は、6世紀前半～後半の祭祀跡と考えられる遺物集中地点SX43である。SX43は、約8×6mの範囲に土師器（甕、罎付甕、甗、杯、須恵器模倣杯、高杯、鉢、土製支脚、移動式カマド、手捏ね土器）、須恵器（杯蓋、杯身、高杯、甕）、滑石製子持ち勾玉、滑石製白玉、滑石製紡錘車、ガラス製小玉、鞆羽口などがあり、近隣の包含層中からは径7.0cmの小型鏡が出土している。

SX43からは、IV類土製支脚3個体、周辺の包含層から1個体が出土している。SX43は祭祀場そのものであるのか、近隣で行われた祭祀の道具立てが最終的に集積されたものか判然としないが、移動式カマド、罎付甕、甗、土製支脚などの存在から、一連の祭祀行為の過程には屋外での炊爨を伴う内容があったことがうかがえる。この屋外での炊爨具セットは、出雲地域のものと内容的に通底するところがあり注目される。

小 結

佐賀県内の主要な土製支脚出土遺跡を概観した。山陰地域の土製支脚と親縁性があるI類・II類・IV類土製支脚の総出土数としては98個体であり、それなりの地域的纏まりが認められる。しかしながら、集落内での出土状況をみると、竪穴建物が集落の主要建築である遺跡の場合、戸別の出現率は6～18%であり、決して日常的に使用する普遍的な道具ではないようである。

出現時期は、牟田寄遺跡、八幡山遺跡（小城市牛津町）例のようにTK47前後の須恵器と共伴するものが知られ、さらに、コマガリ遺跡（佐賀市兵庫町）、赤司遺跡B地点（小城市三日月町）例などは須恵器

が共伴しないものの、小型丸底壺が共伴することなどから5世紀後半まで遡る可能性を残す。

この地域で確認できたIV類土製支脚は、胴体の断面形が方形を志向し、基底部外面に1～4ヶ所程度の非貫通孔を設ける事例が多く見受けられる。山陰地域の土製支脚は、胴部断面形が略円形を志向し、基底部外面には非貫通孔を設けない点で差異が認められる。ただし、基底部外面に設けられた非貫通孔が「炊爨使用時の位置微調整用の手がかかり」という機能上設けられた器官であるとすれば、山陰地域のI・III類土製支脚に見られる胴部中程の穿孔や、II類土製支脚の後方突起の機能と相通じる部分はある。

春日部屯倉との関連

『日本書紀』安閑天皇二年（535）五月条に、火国春日部屯倉の設置記事がある。安閑天皇元年七月条で皇后のために屯倉をあて、宮殿を建てるよう勅令を出したことを受けていると思われ、皇后の春日山田皇女の名代部を置いたことに由来するとされる。（坂本、家永、井上、大野1993）

桃崎祐輔氏の整理によれば、春日部屯倉の候補地としては、①『和名抄』肥後国詫麻郡三宅郷＝熊本市国府あるいは、飽田郡私部郷＝熊本市春日が定説化しているとする。それに対して②佐賀県佐賀市（旧春日村）説もある。佐賀市の旧春日地区は、嘉瀬川を挟んで「山田」地区と隣接し、地名的にも春日山田皇女の名代部に相応しいとされる。また、周辺は佐賀県内随一の前方後円墳密集地で、和泉陶器窯の影響を強く受けている神籠窯跡や古代山城の帯隈山神籠石が隣接し、8世紀には肥前国府が設置されるなど考古学的にも屯倉設置の条件を満たすとされる。（桃崎2010、2012）

「断続ナデ技法」円筒埴輪に着目した井上義也氏は、以下のように指摘する。紀ノ川下流部や畿内中央部に分布する「断続ナデ技法」円筒埴輪を製作する工人は、屯倉の設置など畿内政権による九州経営のテコ入れの一環として九州に派遣されたとし、「断続ナデ技法」円筒埴輪を採用している佐賀市大和町・小熊山古墳の存在は「春日部屯倉」の証左と

している。(井上2004)

春日部屯倉の比定地問題は未だ流動的ではあるが、佐賀市北部が「春日部屯倉」であれば、時代的・空間的にも今回検討している土製支脚使用地帯と重複しており何らかの関連が指摘できるかもしれない。

筑後国の状況

筑後国は、7世紀末以前に筑前国と分離して成立したもので、現在の福岡県南部を範囲とする上国であり、10郡で構成されている。この中でIV類土製支脚が出土しているのは、御井、竹野、上妻、三瀧、生葉の5郡であり、筑後川北岸の御原郡域と南部の下妻、山門、三池郡での出土は未確認である。

筑後国におけるIV類土製支脚の出土数は、確認できたもので18個体に留まる。その内、旧御井郡における土製支脚の出土数は、IV類5個体であり、隣接する竹野郡でIV類土製支脚1個体、上妻郡でIV類5個体、三瀧郡でIV類3個体、生葉郡でIV類4個体の出土数である。このように、筑後国におけるIV類土製支脚の分布は、筑後川南岸域に散在している状況であり、肥前国のように分布の集中地域が見られないことが特徴である。

筑後国内の土製支脚は、肥前国内での例と同様に胴部の断面形が略方形で、基底部外面に非貫通孔を設けており、形態的には筑後川両岸で共通している。

出現時期は、TK23～47期の須恵器を共伴する野中前遺跡2次(久留米市野中町) 堅穴住居SI4例が確実な例といえる。当住居跡では、カマド内の炉床両側に2個体のIV類土製支脚を設置したままの状態出土しており、初期にはカマド内に土製支脚を設置した例があることを示す貴重な実例である。

また、野口三十六遺跡(久留米市野中町) 堅穴住居跡SI5、大的遺跡(久留米市田主丸町) 2号堅穴住居跡、蔵数東野屋敷遺跡(筑後市蔵数) 祭祀土坑3 SK01、西蒲池池淵遺跡(柳川市西鎌池) 21号土坑、生葉地区遺跡(うきは市吉井町) 23号堅穴住居では、須恵器を伴わないが5世紀末～6世紀前半(重藤編年のV、VI期)の土師器と共にIV類土製支脚が出土している。(重藤2010)

このように筑後国で出土しているIV類土製支脚は、15個体中12個体が5世紀末～6世紀前半に使用されたもので、6世紀後半以降への継続性が乏しいことが肥前国との相違点といえる。

肥後国の状況

肥後国は、7世紀末以前に肥前国と分離して成立したもので、現在の熊本県とほぼ同一地域の大国であり、奈良時代は13郡で構成されている。この中で土製支脚が出土しているのは、合志、玉名、詫麻、益城、の4郡であり、緑川以南での出土例は未確認である。

肥後国におけるIV類土製支脚の出土数は、確認できたもので21個体である。その内、旧合志郡(山本郡含)における土製支脚の出土数は、IV類8個体であり、西隣の玉名郡でIV類土製支脚7個体、詫麻郡でIV類2個体、益城郡でIV類4個体の出土数である。このように、肥後国におけるIV類土製支脚の分布は、肥後北西部～中部に散在している状況であり、肥前国のように分布の集中地域が見られないことが特徴である。

肥後国内のIV類土製支脚は、肥前国内での例と同様に胴部の断面形が略方形であるが、基底部外面の非貫通孔は見られない。

出現時期は、TK10の須恵器を共伴する石川遺跡(熊本市植木町) 12区29号・13区30号堅穴住居例が確実な例といえる。また、石川遺跡8区8号堅穴住居は須恵器を伴っていないが、6世紀中頃の土師器と共にIV類土製支脚が出土している。

また、上益城郡益城町の滝川石田遺跡3次3区17号堅穴住居(MT85～TK43期)では、熊本県内では唯一カマド内で向かい合って対に設置されるIV類土製支脚が確認されている。

このように肥後国で出土しているIV類土製支脚は、5世紀末～6世紀前半(MT15以前)に使用された事例が確認できず、全ての事例がTK10以降のものである。このことは、肥前国、筑後国の様相との相違点として特筆される。

5. ま と め

6世紀後半に出現する山陰地域の土製支脚のルーツは長く不明な状態であったが、このたび筑後川河口右岸の佐賀平野と同左岸の筑後平野及び熊本県北部に6世紀代の土製支脚の分布が確認されたことにより、この「環有明海沿岸地域」が山陰地域の土製支脚の有力な故地として浮かび上がった。

さらに、佐賀平野では牟田寄遺跡、白石原遺跡、八幡山遺跡、筑後平野では野口前遺跡、野口三十六遺跡、大的遺跡、蔵敷東野屋敷遺跡、西蒲池池淵遺跡、生葉地区遺跡のように5世紀末に遡るIV類土製支脚を確認することができた。美浦氏によれば、佐賀平野の土製支脚は、古墳時代前～中期に一旦存在が希薄になるとされている。古墳時代前期初頭までの土製支脚の系譜が明確に古墳後期の土製支脚に継続しているのかどうかは判然としない。

また、佐賀平野の中では、旧佐嘉郡域に分布域が集中する傾向が見られ、5世紀末に出現してから7世紀初頭まで継続的に使用されていることが確認された。筑後国では5世紀末～6世紀前半にIV類土製支脚が使用されるが6世紀後半以降へ継続しない。また、肥後国では5世紀末～6世紀前半のIV類土製支脚使用がほとんど見られず、6世紀中頃～後半に出現するなど使用継続期間が短期間であり、かつ分布状況に集中地域が見られないことが特徴として挙げられる。

このIV類土製支脚の出現時期や使用継続期間及び出土量と分布域の集中度という観点から、当該期の九州北部における土製支脚使用中核地域は、旧佐嘉郡域を中心とした佐賀平野中部と考えることができる。このことから類推すれば山陰地域の土製支脚の故地は、「環有明海沿岸地域」の中でも「佐賀平野」が最有力候補と考えられる。

しかし、山陰地域の土製支脚は、I類・II類・III類など前方の突起が2方向に分かれたもので、2個体一セットで甕を支えることができるようになっていいる。それに対して有明海沿岸地域に分布する土製支脚は、IV類に分類される単頭タイプのものである。

単頭タイプは3個体一セットで甕を支える必要があり、具体的な煮炊きの場面を想定すると佐賀平野と山陰地域では使用方法が少々異なるのである。

このような両地域間における土製支脚の型式差から考えれば、佐賀平野・筑後平野地域などから山陰地域に向けて直接的に人や物が移動したことを示すものとは考えにくい。また、日常的な土師器、須恵器などが九州北部から山陰地域に大挙して持ち込まれているような様相も認められないことは、集団的な人々の移住を想起させない。

横穴式石室、石棺式石室、横穴墓などの古墳的要素の検討からは、九州北・中部の情報を山陰側の首長階層が主体的に取捨選択して採用している状況が指摘されている。(小田1986、角田1995、小森2012) 敢えて想像を逞しくすれば、例えば、山陰地域から九州北部に出向いた首長やその代理人などがそこで見聞した「(祭祀行為に伴う)土製支脚を用いた煮炊き」を山陰に帰還してから、自ら執行する祭祀の場などで衆人に披露したことがその普及のきっかけとなるのではなかろうか。

土製支脚が山陰地域のある場所にもたらされてから、山陰中央部の広域に普及する期間は20～30年程度(須恵器編年のTK43～209の間)と考えられる。短期間に食文化の根幹に関わる調理具が一気に刷新される土壌があったことが重要であり、言語や食文化といった日常生活文化を共有する「出雲」というエリアが少なくとも6世紀後半には形成されていることが指摘できるのである。

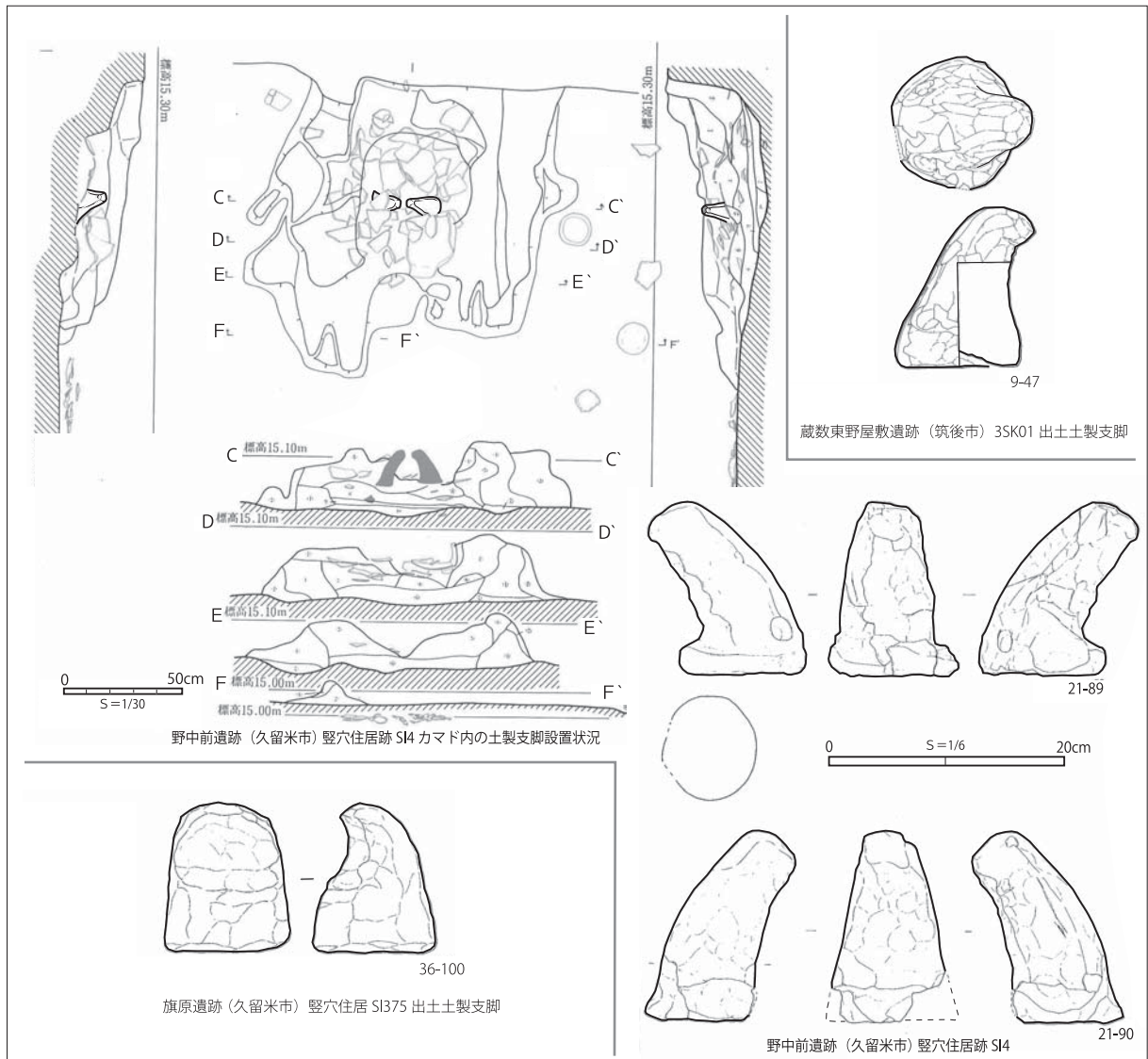
第3節でも述べたことであるが、6世紀において山陰地域と九州北・中部(主に肥後、筑後)の地域間交渉についてはよく知られているが、その中で「佐賀平野」と「山陰地域」の直接的な関係性についてはあまり指摘されたことがない。つまり、古墳や横穴墓の内部構造や石棺など、首長階層が関与した遺構・遺物では両者の関係性がそれほど顕著ではないということでもある。⁽²⁾

しかし、時代を遡ってみれば、弥生時代中期においては、同範の邪視文銅鐸(松江市宍道町・木幡家銅鐸と佐賀県吉野ヶ里町・吉野ヶ里遺跡出土銅鐸)、

表1 九州北部・山陰地域の土製支脚消長概念図

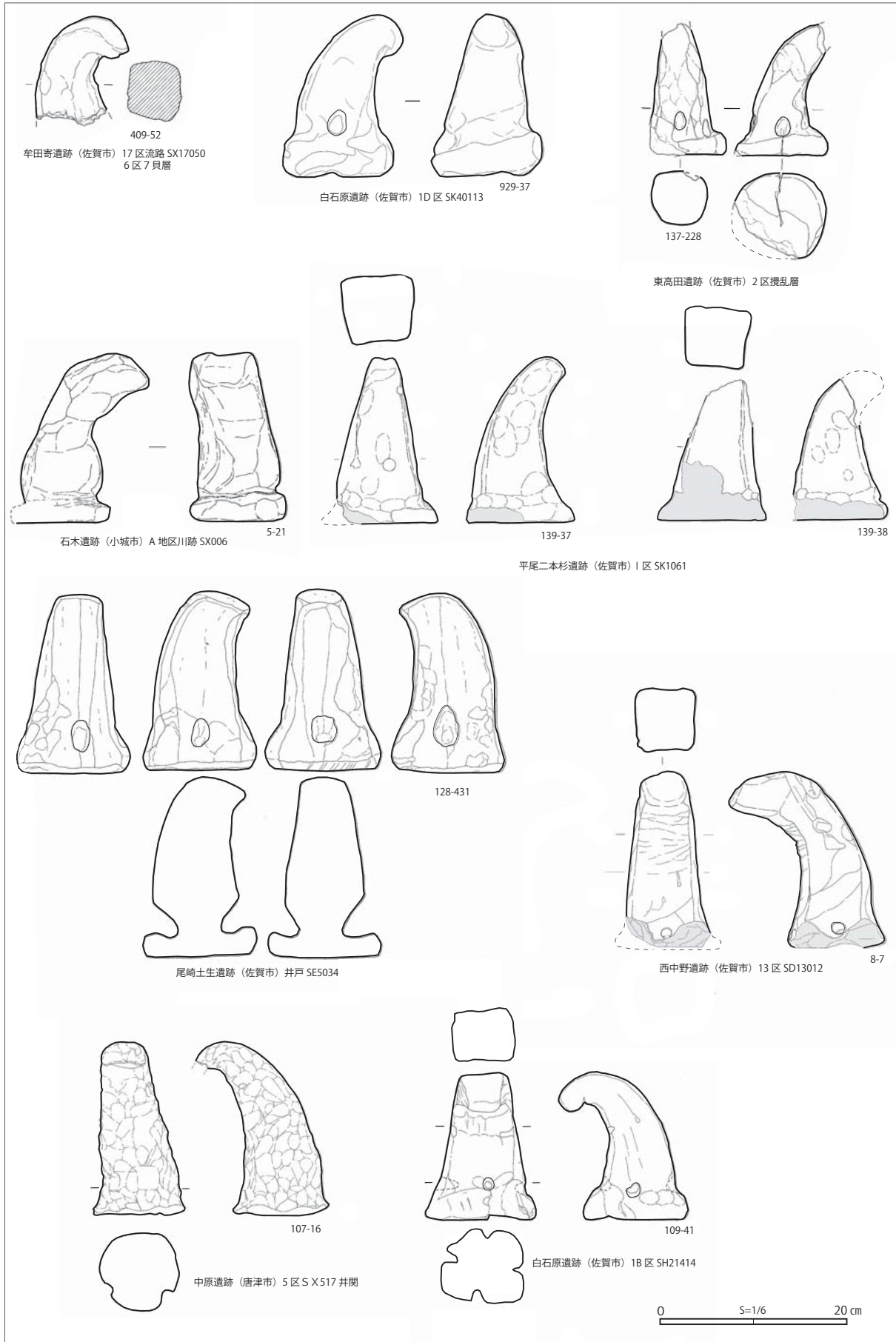
時期	関連する事象	筑前国	筑後国	肥後国	肥前国	豊前国	山陰地域
TK208		■ 松木					
TK23			■ 西蒲池池淵 野中前				
TK47		■ 勝浦古賀				■ 牟田寄	
MT15	527~528年 筑紫君磐井の乱 535・536年 北部九州ミヤケ設置		■ 生葉地区 藏敷東野屋敷	■ 上小田宮の前		■ 白石原 延永ヤヨミ園 牟田寄 白石原 牟田寄 尼寺一本松	
TK10			■		■ 石川	■ 東高田	
TK85			■		■ 滝川石田	■ 東高田 尾崎土生	
TK43			■	■ 新南部		■ 平尾二本杉 西千布 西中野	
TK209 飛鳥 I						■ 平尾二本杉 西中野 白石原	■

※九州の土製支脚はIV類のみ表示



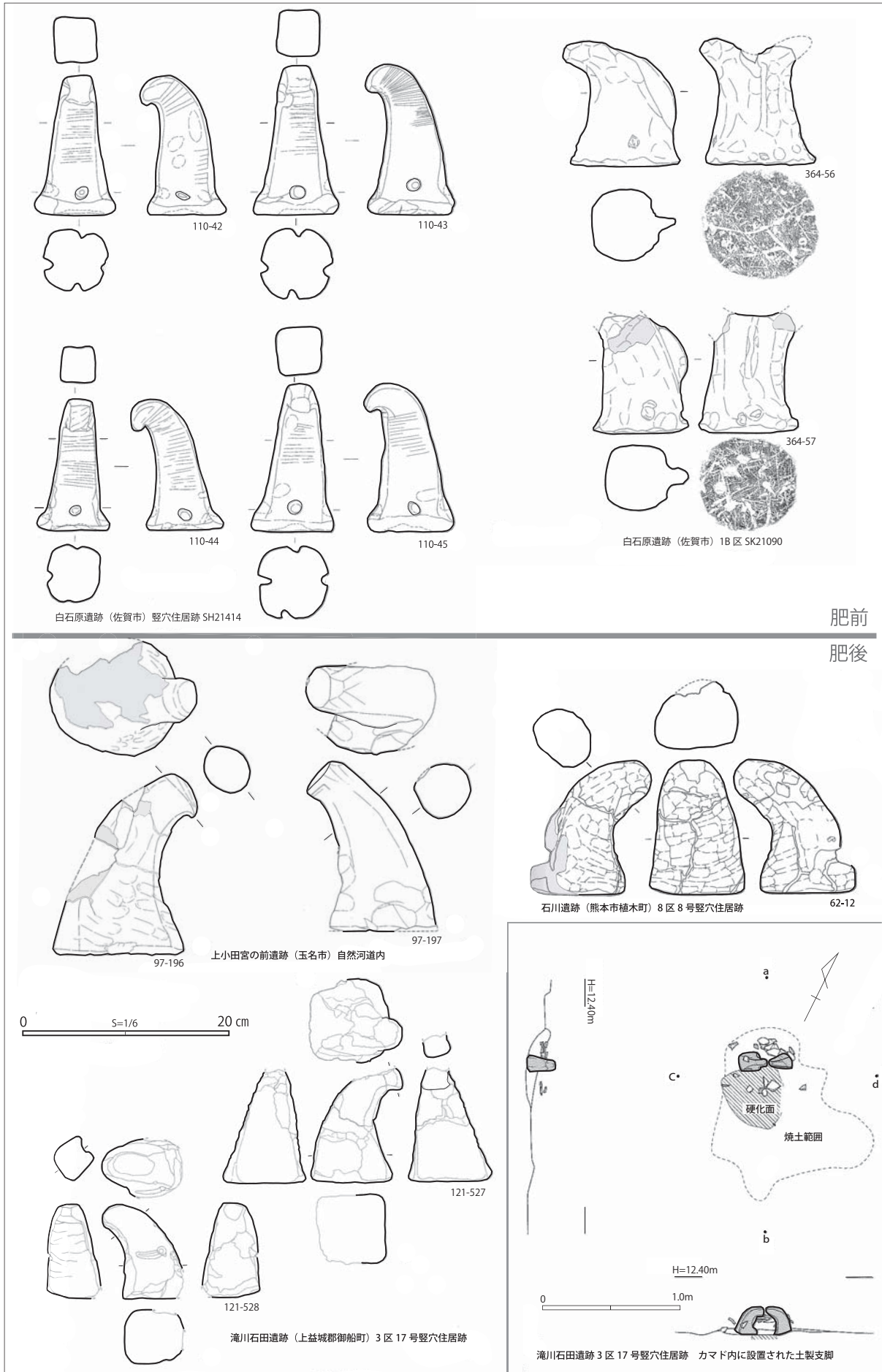
第4図 筑後地域の土製支脚

※図版は各報告書から一部改変のうえ転載している。図中番号は各報告書掲載番号である



第5図 肥前地域の土製支脚

※図版は各報告書から一部改変のうえ転載している。図中番号は各報告書掲載番号である



第 6 図 肥前・肥後地域の土製支脚

中広形銅矛の刃部矢羽根状研ぎ分け（出雲市斐川町・荒神谷遺跡と佐賀県鳥栖市・検見谷遺跡等）など青銅器において親縁性がある。また、古墳時代初頭においては博多湾沿岸地域ほどではないが、佐賀平野でも多量の山陰系土器が出土している。山陰系土器の出土量は、筑後川以南では漸減する傾向があるが、熊本県内でも方保田東原遺跡（山鹿市）、柳町遺跡（玉名市）などで集中的な出土が認められる。（佐賀県教委2002、北島2004、島根県教委1996、春成1995）

このように、山陰地域（特に出雲地域）と佐賀平野は弥生時代以来歴史的につながりが認められ、6世紀において、土製支脚を使用する炊爨文化が伝播したことも偶発的なことではないのかもしれない。

華やかで豊富な考古資料が溢れる北部九州地域においては、「土製支脚」のような地味な考古資料は長年研究の対象にもならず放置されてきたと言ってもよいだろう。これに対して土製支脚研究の意義と可能性を説いた杉井健氏の慧眼と、それに答えて佐賀県内の土製支脚の収集検討を実施され、古墳時代の土製支脚の使用実態の解明に先鞭をつけられた美浦雄二氏の感性には敬服せざるを得ない。山陰地域の土製支脚の故地を模索してきた筆者の不明を開くことができたのは両氏の論考に接した僥倖が端緒であることを記して本論を閉じたい。

【註】

(1) 7世紀集落については、2012年の埋蔵文化財研究会のテーマとされ、また『古文化談叢』で特集が組まれるなど研究が活発化している。

埋蔵文化財研究会2012『集落から見た7世紀 一律令体制成立期前後における地域社会の変貌一』第61回埋蔵文化財研究会

九州古文化研究会 2012『古文化談叢『7世紀史研究』特集1「須恵器の生産と流通」』第67集

九州古文化研究会 2012『古文化談叢『7世紀史研究』特集2「各地域の一般集落」』第68集

九州古文化研究会 2013『古文化談叢『7世紀史研

究』特集3「古代道路」』第69集

九州古文化研究会 2015『古文化談叢『7世紀史研究』特集4「古墳終末期祭祀から律令期祭祀へ」』第73集

(2) 柳沢一男は、「阿蘇溶結凝灰岩製の舟形石棺を持つ熊本山古墳や、横口式家形石棺をもつ西隈古墳、盾形石製表飾をもち阿蘇溶結凝灰岩製の石棺材が出土した西原古墳など「環有明海」的要素が濃い」ことを指摘し、佐賀平野の首長層が「環有明海首長連合」に参画した可能性を説く。

筑後地域で6世紀後半以降に土製支脚が衰退し、逆に肥後地域では土製支脚が出現する。筑紫君磐井の乱後には九州各地にミヤケが設置されるとともに、筑後地域勢力の地盤沈下と肥後地域勢力の台頭があるとされる。土製支脚の地域的盛衰にもこのような地域政治の影響が反映されているのかもしれない。

柳沢一男 1987「石製表飾考」『岡崎敬先生退官記念論集 東アジアの考古と歴史』下巻 岡崎敬先生退官記念事業会編 同朋社出版

瀧ノ上隆介 2012「肥前の諸勢力と対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉 第15回九州前方後円墳研究会 北九州大会発表要旨・資料集』第15回九州前方後円墳研究会

【引用・参考文献】

岩橋孝典 2003「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について」『古代文化研究』第11号 島根県古代文化センター

岩橋孝典 2004「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について2－甗の検討及び甗形土器、土製支脚の使用痕・被熱痕分析－」『古代文化研究』第12号 島根県古代文化センター

岩橋孝典 2007「一煮炊き具からみた古代出雲平野の地域性－出雲西部土製支脚考－」『出雲国風土記の研究Ⅲ 神戸水海北辺の研究(論考編)』島根県古代文化センター

岩橋孝典 2010「土製支脚の分布状況と古代行政境界－6世紀～8世紀の出雲国東部・伯耆国西部の状況から－」『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代

文化センター

池崎譲二 1989「土製支脚について」『古塚1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第202集 福岡市教育委員会

井上義也 2004「断続ナデ技法」円筒埴輪をもつ古墳の性格 -福岡県粕屋町所在の真覚寺古墳と「糟屋屯倉」を中心に-『福岡大学考古学論集-小田富士雄先生退職記念-』小田富士雄先生退職記念事業会

大谷晃二 2011「埋葬施設の諸相 横穴墓」『墳墓構造と葬送祭祀』古墳時代の考古学3 一瀬和夫・福永信哉・北條芳隆編 同成社

大橋信弥 1978「支脚形土製品の系譜」『古代研究』17 元興寺文化財研究所考古学研究室

小田富士雄 1986「島根県の九州系初期横穴式石室再考」『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会

角田徳幸 1993「石棺式石室の系譜」『島根考古学会誌』第10号 島根考古学会

角田徳幸 1995「出雲の後期古墳文化と九州」『風土記の考古学3 出雲国風土記の巻』同成社

角田徳幸 2004「陽刻を持つ閉塞石の新例-大分県田井ヶ迫3号横穴墓-」『島根考古だより』第81号 島根考古学会

角田徳幸 2008「出雲の石棺式石室」『古墳時代の実像』土生田純之編 吉川弘文館

角田徳幸 2009「山陰・北陸の九州系横穴式石室」『考古学ジャーナル』No.583 ニューサイエンス社

「角川日本地名辞典」編纂委員会 1988『角川日本地名大辞典 40福岡県』、1982『角川日本地名大辞典 41佐賀県』、1987『角川日本地名辞典 43熊本県』株式会社角川書店

北島大輔 2004「福田型銅鐸の型式学的研究」『考古学研究』第51巻第3号(通巻203号) 考古学研究会

小林行雄 1941「土製支脚」『考古学雑誌』第31巻第5号 日本考古学 (『古墳文化論考』1976平凡社発行に補訂のうえ再録)

小森哲也 2012「地域間交流としての石棺式石室」『日本考古学』第34号 一般社団法人日本考古学協会

坂本太郎・家長三郎・井上光貞・大野晋1993「巻第五 御間城入彦五十瓊殖天皇」「巻第十八 廣國押武金日

天皇」『日本書紀 上・下』岩波書店

佐賀県教育委員会 2002『吉野ヶ里銅鐸-大曲一の坪地区発掘調査概要報告書-』佐賀県文化財調査報告書第152集

重藤輝行 2010「北部九州における古墳時代中期の土師器編年」『古文化談叢』第63集 九州古文化研究会

島根県教育委員会 1996『出雲神庭荒神谷遺跡』

杉井健 2004「土製支脚研究序論」『先史・古代東アジア出土の植物遺存体(2)平成13~15年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書』 研究代表者 甲元眞之

春成秀爾 1995「神庭(荒神谷)青銅器と出雲勢力」『荒神谷遺跡と青銅器 科学が解き明かす荒神谷の謎』島根県古代文化センター編 同朋社出版

美浦雄二 2014「北部九州の土製支脚について」『先史学・考古学論究VI 考古学研究室創設40周年記念論文集』龍田考古会

桃崎祐輔 2010「九州の屯倉研究入門」『還暦、還暦?、還暦! -武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集-』武末純一先生還暦記念事業会

桃崎祐輔 2012「九州の屯倉研究序説」『一般社団法人日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会

山内英樹 2001「四国の支脚形土器」『庄内式土器研究』XXV 庄内式土器研究会

山本 清 1964「古墳の地域的特色とその交渉-山陰の石棺式石室を中心として-」『山陰文化研究紀要』5 島根大学

吉田 学 2003「土製支脚について-鳥取県内の土製支脚の出土状況を中心に-」『続文化財学論集』水野正好先生古稀記念論文集 文化財学論集刊行会

表2 九州北・中部の古墳時代後期～終末期の土製支脚一覽(肥前国：IV・II・I類のみ)

遺跡名	所在地	旧国郡	出土遺構	造付カマド	報告書掲載番号	個体数	共伴須恵器	型式	時期	文献
西千布遺跡5区	佐賀市金立町大字千布西千布	肥前国佐嘉郡	竪穴住居SH5001	有 24はカマド内	Fig.109-021~024	4	有	IV	6世紀後半	1997 佐賀市教育委員会『西千布遺跡2~7区・友直遺跡7・12区 佐賀市文化財調査報告書第80集』
西千布遺跡4区	佐賀市金立町大字千布西千布	肥前国佐嘉郡	竪穴住居SH4001	無	Fig.104-06	1	有	IV	6世紀後半	1997 佐賀市教育委員会『徳永遺跡群I 徳永遺跡1区 佐賀市文化財調査報告書第86集』
徳永遺跡1区	佐賀市久保泉町大字上和泉字徳永	肥前国佐嘉郡	竪穴住居SH1329	残存状況不良	Fig.053-12	1	無(模倣杯)	IV 断面階円 基部に刺突	6世紀	2006 佐賀市教育委員会『徳永遺跡11区 佐賀市埋蔵文化財調査報告書第9集』
徳永遺跡11区	佐賀市久保泉町大字上和泉字徳永	肥前国佐嘉郡	溝SD11030		Fig.112-13	1	有 TK209~	IV 断面略方形	6世紀末以降	2007 佐賀市教育委員会『西中野遺跡I-6~8区の調査 佐賀市埋蔵文化財調査報告書第13集』
西中野遺跡8区	佐賀市兵庫町大字藤木	肥前国佐嘉郡	土坑SK8041		Fig.95-33~35	3	有	IV 折首	7世紀第2四半期	2009 佐賀市教育委員会『西中野遺跡V-4・3・9・10区の調査 佐賀市埋蔵文化財調査報告書第35集』
西中野遺跡5区	佐賀市兵庫町大字藤木	肥前国佐嘉郡	土坑SK6037		Fig.41-5~7	3	有	IV 5は断面略方形、6・7は胴部4方向穿孔	6世紀後半?	2011 佐賀市教育委員会『西中野遺跡XIV 佐賀市埋蔵文化財調査報告書第65集』
西中野遺跡13区	佐賀市兵庫町大字藤木	肥前国佐嘉郡	溝SD13012		Fig.8-7	1	有	IV 断面略方形 基部4面に刺突	7世紀初頭	2009 佐賀市教育委員会『西中野遺跡IV 佐賀市埋蔵文化財調査報告書第29集』
西中野遺跡40区	佐賀市兵庫町大字藤木	肥前国佐嘉郡	溝SD40008		Fig.40-28	1	有	IV 基部に4面穿孔あり 椀付着	7世紀初頭	2007 佐賀市教育委員会『佐賀市埋蔵文化財調査報告書2002~2001年度 佐賀市埋蔵文化財調査報告書第11集』
西中野遺跡44区	佐賀市兵庫町大字藤木	肥前国佐嘉郡	土坑SK44075		Fig.11-3	1	有 飛鳥I	IV 断面略方形 基部は欠損	7世紀前半	2010 佐賀市教育委員会『藤木一本杉遺跡I 佐賀市埋蔵文化財調査報告書第51集』
兵部北地区重理塚跡内遺跡	佐賀市兵庫町大字藤木	肥前国佐嘉郡	SB8 トレンチ		Fig.98-43	1	無	IV? 断面略方形で下半部は欠損	報告書では弥生時代	2007 佐賀市教育委員会『佐賀市埋蔵文化財調査報告書2002~2001年度 佐賀市埋蔵文化財調査報告書第11集』
藤木一本杉遺跡1区	佐賀市兵庫町大字藤木	肥前国佐嘉郡	1区SD1067		Fig.13-2	1	無	IV 断面略方形で下半部は欠損	6世紀?	2007 佐賀市教育委員会『藤木一本杉遺跡II 佐賀市埋蔵文化財調査報告書第14集』
藤木三本杉遺跡4区	佐賀市兵庫町大字藤木	肥前国佐嘉郡	溝SD4240		Fig.50-25	1	無	IV? 底部のみ 刺突あり		1998 佐賀市教育委員会『牟田奇遺跡IV 佐賀市文化財調査報告書第89集』
牟田奇遺跡	佐賀市兵庫町大字瓦町	肥前国佐嘉郡	15区井戸SE15034		Fig.158-9	1	無	IV 断面略方形 下半は欠損	5世紀末?	1999 佐賀市教育委員会『牟田奇遺跡VII 佐賀市文化財調査報告書第102集』
			15区土坑SK15004		Fig.168-31	1	有 MT15	IV? 下半部のみ。基部に刺突層	6世紀前半	
			16区井戸SE16022		Fig.263-4	1	無	IV 断面略方形 基部欠損	5世紀末?	
			17区溝跡SX17050・6		Fig.408-52	1	有 MT15	IV 断面略方形 基部欠損	6世紀前半	
			10区井戸SE10127		Fig.85-12	1	無(模倣杯)	IV 断面略方形 基部欠損	6世紀	
			No.1 トレンチ		第104図-321,322,333	3		IV 断面略方形	5世紀末~6世紀	
			貝層付近 1区		第110図-391,392	2		IV 断面略方形	5世紀末~6世紀	
			貝層付近 4区		第112図-425	1		IV 断面略方形	5世紀末~6世紀	
佐賀工業団地内遺跡	佐賀市高木瀬町大字長瀬	肥前国佐嘉郡	A地区土坑SK002		Fig.7-8	1	有	IV 断面略方形	7世紀後半	1989 佐賀市教育委員会『佐賀工業団地内遺跡 佐賀市文化財調査報告書第23集』
平尾二本杉遺跡1区	佐賀市高木瀬町大字長瀬	肥前国佐嘉郡	溝SD1005		Fig.077-59	1	無	IV? 下部の破片 側面基部に円形刺突孔	4世紀	
			土坑SK1035		Fig.117-12	1	有	IV? 下部の破片 側面基部に円形刺突孔	6世紀	
			土坑SK1044		Fig.122-05	1	無(模倣杯)	IV? 下部の破片 側面基部に円形刺突孔	6世紀	
			土坑SK1061		Fig.139-35~38	4	有	IV 断面略方形 側面基部に円形刺突孔	6世紀後半	2002 佐賀市木養育委員会『平尾二本杉遺跡I 1区の調査 佐賀市文化財調査報告書第131集』
			土坑SK1088		Fig.154-17	1	有	IV 断面略方形 側面基部に円形刺突孔	6世紀後半	
			土坑SK1109		Fig.168-13	1	有	IV? 下部の破片	7世紀初頭?	
			土坑SK1148		Fig.184-11	1	有	IV? 下部の破片	7世紀初頭	
			土坑SK1179		Fig.200-15,16	2	無(模倣杯)	IV 断面略方形 基部の左右に刺突	6世紀	
			土坑SK1346		Fig.266-01	1	無	IV 断面略方形	?	
			土坑SK2043		Fig.31-15	1	有	IV? 下部の破片	6世紀末	
平尾二本杉遺跡2区	佐賀市高木瀬町大字長瀬	肥前国佐嘉郡	土坑SK3006		Fig.81-18	1	無(模倣杯)	IV 断面略方形 下部は欠損	6世紀後半	2002 佐賀市木養育委員会『平尾二本杉遺跡II 2~6区の調査 佐賀市文化財調査報告書第132集』
平尾二本杉遺跡3区	佐賀市高木瀬町大字長瀬	肥前国佐嘉郡	井戸SE4010		Fig.35-65	1	有	IV 折首で、断面略方形	6世紀前半	
平尾二本杉遺跡4区	佐賀市高木瀬町大字長瀬	肥前国佐嘉郡	溝SD4005		Fig.155-104~107	4	有	IV 105,106断面略方形 107基部円形刺突	6世紀後半	
コマガリ遺跡	佐賀市兵庫町大字藤木	肥前国佐嘉郡	1区溝SD1103		Fig.19-3	1	無	IV? 基部のみ	5世紀?	1998 佐賀市教育委員会『コマガリ遺跡 佐賀市文化財調査報告書第94集』
下和泉一本椎遺跡4区	佐賀市久保泉町大字下和泉一本椎	肥前国佐嘉郡	土坑SK4045		Fig.72-14	1	無	IV? 基部のみ 4方向刺突	6世紀?	1997 佐賀市教育委員会『下和泉一本椎遺跡II 佐賀市文化財調査報告書第81集』

白石原遺跡1区B地点	佐賀市久保泉町大字下和泉	肥前国佐嘉郡	堅穴住居SH21140	有	Fig.94-3 Fig.109-41 Fig.110-42~45 Fig.111-46	1	有	IV 断面略方形 上半部のみ IV 断面略方形 基底部四角から 刺突孔 ? 基底部のみ	6世紀末 6世紀後半 6世紀前半	2012 佐賀市教育委員会『白石原遺跡1 佐賀市埋蔵文化財調査報告書第70集』
白石原遺跡1区C地点	同上	同上	堅穴住居SH21414	6	Fig.135-27	1	有	IV 断面略方形	6世紀前半?	
白石原遺跡1区D地点	同上	同上	堅穴住居SH21575	3	Fig.141-39,40 Fig.140-38	3	有	IV 断面略方形	6世紀初頭	
東高田遺跡	佐賀市久保泉町大字上和泉東高田	肥前国佐嘉郡	堅穴住居SH21600	1	Fig.170-24	1	有	IV 断面略方形	6世紀前半	
白石原遺跡1区E地点	同上	同上	井戸SE21170	1	Fig.303-12	1	有	IV 断面略方形	6世紀前半	
白石原遺跡1区F地点	同上	同上	井戸SE21740	1	Fig.342-23	1	無	IV 断面略方形	7世紀初頭	
東高田遺跡	同上	同上	井戸SD21948	3	Fig.355-1 Fig.364-56,57 Fig.365-58	3	有	IV 断面略方形 II 背部にヒレ状のツマミあり、 基部に刺突	6世紀初頭	
東高田遺跡	同上	同上	土坑SK21090	1	Fig.973-11	1	有	IV 断面略方形 基底部に穿孔	6世紀前半	
東高田遺跡	同上	同上	土坑SK40113	1	Fig.929-37	1	有	IV 断面略方形 基底部に刺突孔	6世紀前半	
東高田遺跡	同上	同上	2区SH252堅穴住居跡	3	Fig.93-44,45,46	3	有	IV? 3区とも基部のみ。基部4面 に刺突	6世紀中葉～後半	
東高田遺跡	同上	同上	2区SH255堅穴住居跡	1	Fig.97-65	1	有	IV? 基部のみ。基部に刺突	6世紀中葉～後半	
東高田遺跡	同上	同上	2区SH261堅穴住居跡	2	Fig.105-101,105	2	有	IV 101は上半部。102は基部	6世紀中葉～後半	
東高田遺跡	同上	同上	2区覆瓦	1	Fig.137-228	1	有	IV 断面略方形で基部四面に刺突あり	6世紀中葉～後半	
東高田遺跡	同上	同上	3区SH363堅穴住居跡	1	Fig.162-77	1	有	IV? 基部のみ。基部に刺突あり	6世紀中葉～後半	1992 佐賀市教育委員会『原ノ町遺跡・ 東高田遺跡・榑木遺跡・北谷遺跡・南谷 遺跡 佐賀市文化財調査報告書第38集』
東高田遺跡	同上	同上	3区SH369堅穴住居跡 床直上	1	Fig.170-100	1	有	IV 断面略方形 下半は欠損	6世紀中葉～後半	
尼寺一本松遺跡	佐賀市大和町大字尼寺	肥前国佐嘉郡	包合層	2	第12区-71,72	2	有	IV? 71は基部に刺突 72は上半部 のみ 断面略方形	6世紀前半?	2003 大和町教育委員会『平成14年度大 和町内遺跡確認調査 大和町文化財調査 報告書第72集』
春日丘遺跡3次	佐賀市大和町大字尼寺	肥前国佐嘉郡	第2トレンチSD02	2	第3区-27,28	2	瓦質	27はIV・断面略方形 28はI 額下 のみ	平安時代以降?	1996 大和町教育委員会『春日丘遺跡 大和町文化財調査報告書第42集』
西山田二本松遺跡A	佐賀市大和町大字川上字二本松	肥前国佐嘉郡	堅穴住居跡SB183	1	Fig.75-387	1	有	IV 断面略方形 基底部に刺突	7世紀?	1996 佐賀県教育委員会『西山田二本松 遺跡 佐賀県文化財調査報告書第128集』
大願寺二本松遺跡	佐賀市大和町大字川上字二本松	肥前国佐嘉郡	17G SI-3	1	第68区-5	1	有	IV 断面円形	6世紀	
阿高遺跡C地区	佐賀市北川原町大字光法寺阿高	肥前国佐嘉郡	43G SI-2	1	第89区-3	1	有	IV 断面円形	6世紀	
阿高遺跡C地区	同上	同上	43G SI-4	1	第92区-3	1	有	I 断面円形	6世紀	1993 大和町教育委員会『大願寺二本松 遺跡 大和町文化財調査報告書第22集』
小杭村中遺跡	佐賀市北川原町大字光法寺阿高	肥前国佐嘉郡	井戸SE079	1	Fig.10-31	1	有	IV 断面略方形 基部欠損	6世紀後半	1994 佐賀市教育委員会『阿高遺跡・寺 裏遺跡・榑木遺跡 佐賀市文化財調査 報告書第40集』
天神軒遺跡	佐賀市諸富町山領字小杭分二本松	肥前国佐嘉郡	1区土坑SK020	1	図86-33	1	有	IV 断面略方形で基底部に穿孔	6世紀	1989 佐賀県教育委員会『筑後川下流用 水事業に係る文化財調査報告書2 佐賀 県文化財調査報告書第35集』
赤司遺跡B地点	小城市松尾字天神軒	肥前国小城市	5号住居跡	1	第15区-45	1	有	IV 断面略方形	6世紀末～7世紀	1982 小城市教育委員会『天神軒遺跡 小城市文化財調査報告書第1集』
石木遺跡	小城市三日町赤司	肥前国小城市	祭祀場跡(土坑)	1	第15区-91	1	無	IV 断面略方形	祭祀場は5世紀	1979 佐賀県教育委員会『赤司遺跡群 佐賀県文化財調査報告書第4集』
八幡山遺跡	小城市三日町石木	肥前国小城市	A地区川跡SX006	1	第5区-21	1	有	IV 基部四方に刺突	6世紀前半～後半	1976 佐賀県教育委員会『石木遺跡 佐 賀県文化財調査報告書第35集』
吉野ヶ里遺跡V区	小城市牛津町大字下砥川寺町	肥前国小城市	C-1区堅穴住居SK151	1	Fig.54-29	1	有	IV 方柱状 基部の左右に刺突	5世紀末	1995 牛津町教育委員会『八幡山遺跡I 牛津町文化財調査報告書第6集』
尾崎土生遺跡V区	神埼郡吉野ヶ里町大字鶴字馬郡	肥前国神埼郡	小穴P-87	1	Fig.63-53	1	無	IV 断面略方形	6世紀?	1994 佐賀県教育委員会『筑後川下流用 水事業に係る文化財調査報告書4 佐賀 県文化財調査報告書第123集』
志波屋六本松遺跡	神埼市大字尾崎字土生	肥前国神埼郡	井戸SE5034	1	第128区-431	1	有	IV 基部の四方向に穿孔	6世紀後半	1999 神埼町教育委員会『尾崎土生遺跡 神埼町文化財調査報告書第65集』
屋形原遺跡	神埼市大字志波屋字六本松	肥前国神埼郡	堅穴住居跡SH008	1	第62区-258	1	有	IV 断面円形	6世紀後半?	1983 神埼町教育委員会『志波屋六本松 遺跡 神埼町文化財調査報告書第9集』
菜畑内田遺跡	三養基郡上峰村大字塚字一本松	肥前国三養基郡	包合層	1	第9区-23	1	有	IV 断面方形	6世紀?	1979 上峰町教育委員会『屋形原遺跡 上峰町文化財調査報告書第2集』
菜畑内田遺跡	唐津市神田字内田	肥前国松浦郡	3区SX43(祭祀遺構)	3	Fig.30-144,145 Fig.31-146	3	有	IV 144,145は鳥頭状、146は基底 部のみ。基底部刺突はない	6世紀前半～後半	2005 『菜畑内田遺跡(5) 唐津市文化 財調査報告書第121集』
中原遺跡5区	唐津市神田字内田	肥前国松浦郡	15年度3区包合層	1	Fig.17-64	1	有	IV 先端は欠損	6世紀前半～後半	2006 唐津市教育委員会『菜畑内田遺跡 (6) 唐津市文化財調査報告書第128集』
中原遺跡5区	唐津市大字原字瀬ノ内	肥前国松浦郡	5区SX517(井関?)	1	図107-16	1	有	IV 基底部の方向に刺突孔。断 面円形	7世紀	2009 佐賀県教育委員会『中原遺跡III 佐賀県文化財調査報告書第179集』
中原遺跡5区	同上	同上	5区SD552	1	図92-143	1	有	IV 窟状の跡みあり	6世紀後半	

九州北・中部の古墳時代後期～終末期の土製支脚一覽表（筑前国：IV類のみ）

高畑遺跡20次	福岡市博多区飯付6丁目	筑前国那珂郡	134号井戸	Fig.108-728	1	無	IV	断面は長方形	8世紀?	2012 福岡市教育委員会『筑前郡誌?福岡市埋蔵文化財調査報告書第1150集』
松木遺跡150街区	筑紫郡那珂川町大字松木字瀬戸口	筑前国那珂郡	12号竪穴住居	第80図-75	1	有 TK208~TK23	IV	断面は円形	5世紀後半	1984 那珂川町教育委員会『松木遺跡I那珂川町文化財調査報告書第11集』
勝浦古賀遺跡	福津市津屋崎町大字	筑前国宗像郡	SK-1・土器溜り6	Fig.90-588,589	1	有 TK47~	IV	断面は円形か?	5世紀末	2000 津屋崎町教育委員会『勝浦津屋崎町文化財調査報告書第16集』

九州北・中部の古墳時代後期～終末期の土製支脚一覽表（筑後国：IV類のみ）

白山遺跡1次	久留米市白山町字鳥飼	筑後国三浦郡	東区竪穴住居S130	第30図-3	1	有	IV?	IV? 頭部は欠損	8世紀	2011 久留米市教育委員会『久留米市埋蔵文化財調査報告書第300集』
旗原遺跡2次	久留米市荒木町下荒木	筑後国御井郡	竪穴住居S1375	第36図-100	1	有	IV	IV 基底は直立気味で頭部のみじゃくれる	6世紀後半	2001 久留米市教育委員会『旗原遺跡-第2次調査-久留米市文化財調査報告書第171集』
野中前遺跡2次	久留米市野中町	筑後国御井郡	竪穴住居S14	Fig.21-89,90	2	有 47	IV	IV 89の基底部に両側穿孔	5世紀末~6世紀初頭	1988 久留米市教育委員会『野中前遺跡久留米市文化財調査報告書第146集』
野口三十六遺跡	久留米市野中町字三十六	筑後国御井郡	竪穴住居S15	18図-22	1	有	IV?	IV? 断面略方形	6世紀前半	1994 久留米市教育委員会『野中三十六遺跡久留米市文化財調査報告書第316集』
大的遺跡2・3次	久留米市田丸町大字田丸字丸字大的	筑後国竹野郡	2号竪穴住居	第11図-33	1	無	IV	IV 断面楕円形	6世紀前半	2004 福岡県教育委員会『大的遺跡II一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告21』
古賀ノ上遺跡	久留米市北野町大字八重亀	筑後国御井郡	II-B区5号竪穴住居	第16図-8	1	無	IV	IV 断面楕円形	6世紀	1995 北野町教育委員会『古賀ノ上遺跡I北野町文化財調査報告書第2集』
蔵敷森の木遺跡	筑後市大字蔵敷	筑後国上妻郡	175号竪穴住居跡	第256図-1,2	2	無	IV	IV 断面略方形	6世紀?	1990 筑後市教育委員会『蔵敷遺跡群筑後市文化財調査報告書第6集』
蔵敷東野屋敷遺跡	筑後市大字蔵敷字東野屋敷	筑後国上妻郡	森社土坑3SK01	Fig.8,29,非掲載	3	無	IV	IV 29は基底部のみ。47はIVで基底部背後に刺突。非掲載は完形だが取り上げに失敗	6世紀前半	2010 筑後市教育委員会『蔵敷東野屋敷遺跡 筑後市文化財調査報告書第95集』
西蒲池池淵遺跡	柳川市大字西蒲池	筑後国三浦郡	17号土坑 21号土坑	第38図-16 第42図-31	1	有	IV	IV 上半部のみ	6世紀?	1999 西蒲池池淵遺跡I福岡県文化財調査報告書第289集』
生業地区遺跡II	うきは市吉井町大字生業字浅引	筑後国生業郡	23号竪穴住居跡	第57図-29,30,31,32	4	有 小破片	IV	IV 29は断面略方形 その他は断面楕円	6世紀前半?	1999 吉井町教育委員会『生業地区遺跡II吉井町文化財調査報告書第11集』

九州北・中部の古墳時代後期～終末期の土製支脚一覽表（豊前国：IV類のみ）

延永ヤヨミ園遺跡III-2次	行橋市延永	豊前国中津郡	III-C区谷部包含層1層	第151図-10	1	有 MT15	IV	IV 断面は円形	6世紀前半	2015 九州歴史資料館『延永ヤヨミ園遺跡III区II』
延永ヤヨミ園遺跡IV-B区	行橋市延永	豊前国中津郡	IV-B区105号竪穴住居跡	第150図-23	1	有 MT15~TK10	IV	IV 断面は円形だが正面はくぼむ	6世紀前半	2015 九州歴史資料館『延永ヤヨミ園遺跡IV区I』

九州北・中部の古墳時代後期～終末期の土製支脚一覽表（肥後国：IV類のみ）

石川遺跡	熊本市植木町大字石川字小迫	肥後国合志(山本)郡	8区8号竪穴住居跡 12区29号竪穴住居跡 13区30号竪穴住居	第62図-11,12 第145図-37,38,39 第140図-5,6 第159図-5 第89図-2,3	1 3 3	無 有 有 TK10	IIはVで中実円柱状マド脇で出土 IV 床面から浮いてバラけて出土 第140図-5,6はIV類 第159図-5はV	12はIVでカ 6世紀中頃 6世紀中頃 6世紀中頃	2002 熊本町教育委員会『石川遺跡 熊本町文化財調査報告書第14集』	
滴水館遺跡	熊本市植木町滴水字西原	肥後国合志(山本)郡	畑耕作中出土	第97図-195,196,197	2	無	IV	IV 断面円形	6世紀	2004 熊本町教育委員会『平成15年度熊本町内遺跡発掘調査報告書 熊本町文化財調査報告書第19集』
上小田宮の前遺跡	玉名市上小田	肥後国玉名郡	8・9区自然河道	第97図-195,196,197	7	有 MT15~TK43	IV	IV 頂部は少し扁平になる。図化は3個体	6世紀	2010 熊本県土産教育委員会『上小田宮の前・養寺遺跡 熊本県文化財調査報告書第255集』
新南郡遺跡群	熊本市中央区渡路8丁目	肥後国詫麻郡	1区竪穴住居SO42 1区竪穴住居SO48	図52-236 図63-283	1 1	有 TK43	IV	IV 基底部に1方向刺突 上部欠断面略方形	6世紀後半 6世紀後半	2015 熊本県教育委員会『新南郡遺跡群3 熊本県文化財調査報告書第311集』
滝川石田遺跡3次	上益城郡御船町滝川	肥後国益城郡	3区17号竪穴住居跡 3区19号竪穴住居跡	第121図-527,528 第124図-533,534	2 2	有 MT85	IV	IV 2点ともに断面略方形	6世紀後半	2014 熊本県教育委員会『滝川石田遺跡・辺田見中遺跡 熊本県文化財調査報告書第301集』